

✓ 4. 外国人特別研究員との共同研究の概要（外国人特別研究員との分担状況を明らかにした上で簡潔に記述してください。）

Summary of the collaborative research (Clarify your role and the Fellow's role in the collaborative research.)

本研究では、第一次世界大戦期の各国の外交政策を規律した国際的規範がいかに変容したのかを、日本・東アジアというレンズを通して解明した。具体的には、同大戦中から戦後にかけての日本の外交政策を「国際主義と孤立主義の相剋の過程」と捉え、この対立図式がいかなるプロセスのもとで形成・展開されたのか、それが国際秩序全体にいかなるインパクトを及ぼしたのかを、第二次世界大戦期をも視野に入れて検討した。とりわけ、第一次世界大戦中から戦後にかけての各国の捕虜・抑留者への待遇、パリ講和会議やワシントン会議への日本の対応、日本の政治指導者や知識人の人種意識などについて分析を行い、国内外で史料調査を行うとともに、その成果を図書、論文、学会報告などの形で公表した。

本研究の遂行にあたっては、国立国会図書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室などが所蔵する基本的な一次史料を地道に調査するのみならず、奈良岡が代表を務める「近代日本の捕虜・抑留経験に関する国際共同研究」(京都大学SPIRITS〔「知の越境」融合チーム研究プログラム〕、2017-19年度)、同じく奈良岡が代表を務める「第一次世界大戦中・戦後の日中関係と東アジア国際秩序：対華二十一ヶ条要求の波紋」(科研費基盤研究(B)、2018年度-)、梶原克彦氏(愛媛大学法文学部准教授)を中心とする愛媛大学グローバル地域研究ユニットとも連携しながら、日本国内外で広範な史料調査、フィールドワークを実施した。

2017年3月には愛媛大学において、第一次世界大戦期の捕虜・抑留者の待遇に関する研究会を開催した。また、同大学で開催された愛媛大学法文学部・岩手大学人文社会学部学術交流公開講演会に出席し、議論に参加した。さらに、愛媛県松山市および徳島県鳴門市において、第一次世界大戦期のドイツ人捕虜収容所跡地および「青島歯獲図書」（愛媛大学図書館所蔵）の調査を行った。松山市、鳴門市では2018年6月にも再度調査を実施した。奈良岡、マーフィーは、2017年3月に中国山東省青島の日独戦争関係遺跡、2018年1月に台湾の中央研究院、国史館、2019年2月には中国江蘇省南京市の中国第二歴史档案館、侵華日軍南京大屠殺遭難同胞紀念館、上海市の上海ユダヤ難民紀念館、上海淞滬抗戦記念館において共同調査を行い、日清戦争から日中戦争に至る捕虜待遇の変遷に関して調査を重ねた。また、2019年3月には、マルタの英国人墓地、海洋博物館、国立戦争博物館などにおいて、第一次世界大戦中から戦後にかけての地中海における日本海軍の活動、第一次世界大戦中のマルタにおけるドイツ人捕虜の待遇などに関する調査を行なった。この他、マーフィーは2019年1月に英国の国立公文書館、奈良岡は2019年2月に香港歴史博物館、同年3月にスイスの国際連盟文書館、チェコのカレル大学文書館でも史料調査を行った。

博物館、同年3月にヘイスの国際連盟文書館、奈良岡、マーフィーとノエーともに、奈良岡は、良論語を主とした。本研究課題にして第一次世界大戦に関する放送教材においては、マーフィー氏の協力を得つつ、松山市および鳴門市で口頭講演を行った。奈良岡は、日本におけるキリストとして執筆した『日本政治外交史』(五百旗頭薰)の著者であるが、その著書は、現状に鑑み、英語の研究業績が極めて少ないという現状についての分析を進め、共著や学会や研究会で報告や講演を多数行った。奈良岡は、日本におけるキリストとして執筆した『日本政治外交史』(五百旗頭薰)の著者であるが、その著書は、現状に鑑み、英語の研究業績が極めて少ないという現状についての分析を進め、共著や学会や研究会で報告や講演を多数行った。

マーフィーは、博士論文以来の研究テーマである「第一次世界大戦中に日本が国際法に則って、日本政府が国際法による評価は、同時代のヨーロッパなどとの比較の視点を欠き、時に日本の対応を単純に礼遇の実態を踏まえた上で、日本における捕虜待遇を厚遇したことと、その傾向を帶びることも、日本においてはよく知られるが、その評価は、あつた。これに対してマーフィーは、ヨーロッパやアフリカにおける捕虜待遇の実態を、その評価と並んで考察した。マーフィーは、この研究成果を2017年にケンブリッジ大学出版から著述として論文集に寄稿した（近刊予定）。さらに、1921年に発生した平明丸事件（シベリアにおけるトルコ人捕虜をイスタンブルへ移送中の日本船平明丸がエーゲ海でギリシャ軍により長期抑留された事件）の検討を進め、第一次世界大戦後の中東問題について考察を深めた。この成果は、2019年3月にマルタ島で行われた国際ワークショップで報告され、近く論文として刊行される予定である。

この他奈良岡は、ドイツのベルリン自由大学を中心として、第一次世界大戦の研究成果を英語で公開する学術オンライン辞典プロジェクト『1914-1918-Online -International Encyclopedia of the First World War』の編集者一人として、「東アジア」の「Entry Section」を担当した。分担者（マーフィー）はこれまで各項目のネイティブチェックを行うなど、同プロジェクトに関わってきた経緯があり、両者は編集者であるヤン・シュミット氏（ルーヴェン・カトリック大学准教授）と協力しながら、各項目の編集や執筆者との連絡・調整を行った。

以上に述べた通り、奈良岡、マーフィーは、後者の日本学術振興会外国人特別研究員の採用期間中、共同調査や研究上の協力を継続的に行い、多くの成果を挙げることができた。

5. 外国人特別研究員との共同研究の成果とその評価

Results and Evaluation of the collaborative research

本共同研究の成果は、著書、論文、講演の形で発表されている。このうち著書、論文およびいくつかの学会報告と講演を内容によって分類すれば、以下の通りとなる（学会報告と講演については、同内容のもの、論文と内容が重複するものなどは割愛した）。

1) 第一次世界大戦期の捕虜・抑留者の待遇について明らかにしたもの

• Mahon Murphy, *Colonial Captivity during the First World War: Internment and the Fall of the German Empire 1914–1919*, Cambridge University Press, September 2017, 256 pages (書籍：单著)

[•] Mahon Murphy, ‘The Treatment of German Prisoners of War in Japan in the Global Context of the First World War’, in Jan Schmidt and Katja Schmidtptott (eds.) *The East Asian Dimension of the First World War: Global Entanglements and Japan, China, and Korea 1914–1919* (Campus Verlag, Frankfurt, New York, forthcoming) (論文)

• Mahon Murphy, ‘The Internment of German Colonial Settlers during the First World War’ at Department of History, Cambridge University, UK. International History and Prisoners of War Workshop, 16 March 2018 (講演)

- Sochi Naraoka, Historiography of POW and Civilian Internees in Japan, International Workshop ‘Prisoners of War and Civilian Internees from the Viewpoint of East Asia’ at University of Cambridge, UK, 17 March 2018 (報告)

2) 第一次世界大戦期の日本の外交政策や国内政治の変動について明らかにしたもの

- 五百旗頭薰・奈良岡聰智『日本政治外交史』(放送大学教育振興会、2019年、全286頁) (書籍、共著)
- 奈良岡聰智「第一次世界大戦初期の日本における政党系新聞の外交論一大戦勃発から青島占領までー」(『法学論叢』182巻4・5・6号、2018年3月、198-287頁) (論文)
- 奈良岡聰智「吉野作造の第一次世界大戦論」(『吉野作造研究』13号、2017年4月、22-29頁) (論文)
- Sochi Naraoka, Japan's Twenty-One Demands and Anglo-Japanese relation, in Antony Best(ed.) *Britain's Retreat from Empire in East Asia, 1905-1980* (Routledge, 2017, pp.35-56)

3) 第一次世界大戦後の日本における国際主義について考察したもの

- Mahon Murphy, ‘Isolated Internationalists? Taisho Era Japan and the Global Order’ at Tokyo University, Japan History Group, 27 June 2017 (講演)
- Mahon Murphy, ‘Taisho Japan and the International Order’ at St Antony’s College, Oxford, UK: Rethinking the World Order: International Law and International Relations at the End of the Great War, 1 September 2017 (講演)
- Mahon Murphy, ‘Japan of the World: Japan, Peace and Internationalism in the Wake of the First World War’ at Ecole Française d’ Extrême-Orient and the Italian School of East Asian Studies, Kyoto, 20 February 2018 (講演)

4) その他

- Mahon Murphy ‘The Holey City: British Soldier’s Perceptions of Jerusalem during its Military Occupation 1917-1920’ , in Joseph Clarke and John Horne (eds), *Peripheral Visions, European Soldiers and Cultural Encounters in the Long Nineteenth Century* (Palgrave, London, 2018, pp.343-363) (論文)
- Mahon Murphy 「第一次世界大戦期のアフリカ・アジアにおけるドイツのプロパガンダ」 (早稲田大学、2018年6月21日、講演)

以上の中で最も重要な成果は、1)に掲げたマーフィーの研究書である。4で前述したとおり、この研究は第一次世界大戦期の日本の捕虜待遇研究に新地平を開いたものである。今後この時期の日本の捕虜政策を研究するためには同書は必読文献であり、日本の研究者や史跡保存関係者が容易に読めるようになるため、早期の翻訳が望まれる。今後同書の翻訳出版を行うことを検討している。

上述したとおり、奈良岡、マーフィーは、本研究期間中、捕虜・抑留者に関する史料調査を継続的に実施してきた。今後その成果を活かして、論文集を刊行することを計画している。